

日蓮大聖人御書全集

いちのさわのにゆうどうごしよ

一谷入道御書

新版
1758
S
1764

いちのさわのにゆうどう(しよ

一谷入道御書

けんじがんねん

がつ にち

さい いちのさわのにゆうどう

つま

建治元年(75) 5月8日 54歳 一谷入道の妻

い こうちようがんねんたいさいかのとりごがつじゆうににち ごかんき 被

去ぬる弘長元年太歳辛酉五月十二日に御勘気をこうぼ

いずのくにいとうのこう るざい

りて伊豆国伊東郷というところに流罪せられたりき。

ひようえのすけよりとも 流 所

兵衛介頼朝のながされてありしところなり。さりしかども、

おな さんねんたいさいみずのといにがつ め かえ

ほどもなく、同じき三年太歳癸亥二月に召し返されぬ。ま

ぶんえいはちねんたいさいかのとひつじくがつじゆうににち かさ ごかんき こうむ

た文永八年太歳辛未九月十二日、重ねて御勘気を蒙りし

くび は しさい

が、たちまちに頸を刎ねらるべきにてありけるが、子細あ

ゆえ 延 ほっこくさど しま ちぎよう

りけるかの故にしばらくのびて、北国佐渡の島を知行する

むさしのぜんじあず

うち もの

さた

か しま

武蔵前司預かつて、その内の者どもの沙汰として彼の島に

い っ

か しま もの

いんが ことわり

わきま

行き付いてありしが、彼の島の者ども、因果の理をも弁

荒 夷

荒 当

もう

えぬあらえびすなれば、あらくあたりしことは申すばかり

いちぶん うちろ 二ころ

なし。しかれども、一分も恨むる心なし。

ゆえ

にほんこく しゆ

すこ

どうり し

その故は、日本国の主として少しも道理を知りぬべき

さがみどの

くに

助

い もの

しさい き

解

相模殿だにも、国をたすけんと云う者を、子細も聞きほどこか

りふじん

しざい

充

況

末

ず理不尽に死罪にあてがうことなれば、いおうや、そのすえ

もの

善

頼

悪

憎

の者どものことは、よきもたのまれず、あしきもにくから

ほうもん

もう

はじ

いのち

ほけきよう

たてまつ

ず。この法門を申し始めしより、命をば法華経に奉り、

な じつぼうせかい しよぶつ じようど 流 おも もう
名をば十方世界の諸仏の浄土にながすべしと思ひ儲けしな
り。

こうえん 言 もの しゆ えい いこう きも と わ はら
弘演といひし者は、主の衛の懿公の肝を取つて、我が腹を
さ おさ し よじよう もの しゆ ちはく 恥
割いて納めて死ににき。予讓といひし者は、主の智伯がはじ
雪 つるぎ 吞 し
をすすがんがために、剣をのみて死せしぞかし。これはた

せけん おん 報 況
だわずかの世間の恩をほうぜんがためぞかし。いおうや、

むりようこう このかたるくどう じんりん ほとけ 成
無量劫より已来六道に沈淪して仏にならざることは、

ほけきよう おん み 惜 いのち 捨 故
法華経の御ために身をおしみ命をすてざるゆえぞかし。さ

きけんぼさつ もう ぼさつ せん にひやくさい あいだみ 焼
れば、喜見菩薩と申せし菩薩は、千二百歳が間身をやきて

にちがつじようみようとくぶつ

くよう

しちまんにせんさい

あいだ

臂

焼

日月浄明德仏を供養し、七万二千歳が間ひじをやきて

ほけきよう

くよう

たてまつ

ひと

いま

やくおうぼさつ

ふきよう

法華経を供養し奉る。その人は今の薬王菩薩ぞかし。不軽

ぼさつ

ほけきよう

おん

たこう

あいだ

めりきにく

じようもくがりやく

菩薩は、法華経の御ために、多劫が間、罵詈毀辱・杖木瓦礫

責

いま

しゃかぶつ

ほとけ

成

にせめられき。今の釈迦仏にあらずや。されば、仏になる

どう

とき

品々

変

ぎよう

道は、時によりてしなじなにかわりて行ずべきにや。

いま

よ

ほけきよう

とき

今の世には、法華経はさることにておわすれども、時に

こと異

習

さんりん

交

どくじゆ

よつて事ことなるならいなれば、山林にまじわりて読誦す

さと

じゆう

えんぜつ

じかい

ぎよう

とも、はたまた里に住して演説すとも、持戒にて行ずと

ひじ

焼

供養

ほとけ

成

も、臂をやいてくようすとも、仏にはなるべからず。日本

にほん

こく ぶつぼうさか

国は仏法盛んなるようなれども、ぶつぼう 仏法についてふしぎ 不思議あり。

ひと し たと むし ひ い とり へび くち い

人これを知らず。譬えば、虫の火に入り、鳥の蛇の口に入る

がごとし。

しんごんし けごんしゆう ほつそう さんろん ぜんしゆう じようどしゆう りっしゆうとう

真言師・華嚴宗・法相・三論・禅宗・浄土宗・律宗等の

ひとびと われ ほう 得 われ しようじ 離 思

人々は、我も法をえたり、我も生死をはなれなんとはおもえ

た ほんしとう えきよう こころ 弁

ども、立てはじめし本師等、依経の心をわきまえず、ただ

わ こころ 思 付 きよう 取 立

我が心のおもいつきてありしままにその経をとりたてん

思 果 無 こころ ほけきよう 背 ぶつゐ

とおもうはかなき心ばかりにて、法華経にそむけば、仏意

かな 知 弘

に叶わざることをばしらずしてひろめゆくほどに、こくしゆ 国主・

ばんみん

しん

たこく

渡

とし

久

万民これを信じぬ。また他国へわたりぬ、また年もひさし

すえずえ

がくしやとう

ほんし

誤

知

くなりぬ。末々の学者等は、本師のあやまりをばしらずし

し

弘

傲

ひとびと

ちしや

思

て、師のごとくひろめならう人々を智者とはおもえり。

みなもと

濁

流

清

み曲

影

源にぎりぬれば、ながれきよからず。身まがれば、かげ

直

しんごん

がんそ

ぜんむいとう

既

じごく

お

なおからず。真言の元祖・善無畏等は、すでに地獄に堕ち

かいげ

じごく

のが

もの

ぬべかりしが、あるいは改悔して地獄を脱れたる者もあり、

えきよう

弘

ほけきよう

さんだん

あるいはただ依経ばかりをひろめて法華経の讚歎をもせざ

しょうじ

はな

あくどう

お

ひと

れば、生死は離れねども悪道に堕ちざる人もあり。しかる

すえずえ

もの

し

しよにんいちどう

しん

を、末々の者このことを知らずして、諸人一同に信をなし

ぬ。譬たとえやぶば、破やぶれたる船ふねに乗のつて大海たいかいに浮うかび、酒さけに酔よえ
る者ものの火ひの中なかに臥ふせるがごとし。

にちれん

み ゆえ

ぼだいしん

おこ

日蓮にちれん、これを見みし故ゆえに、たちまちに菩提心ぼだいしんを發おこしてこの

もう

はじ

せけん

ひとびと

もう

しん

ことを申もうし始はじめしなり。世間せけんの人々ひとびと、いかに申もうすとも信しんず

しがい

るざい

ることはあるべからず、かえりて死罪しがい・流罪るざいとなるべしと

し

いま

にほんこく

ほけきよう

背

はかねて知しつてありしかども、今の日本国いま にほんこくは法華經ほけきようをそむ

しゃかぶつ

捨

故

ごしよう

あ びだいじよう

お

き、釈迦仏しゃかぶつをすつるゆえに、後生ごしように阿鼻大城あびだいじように墮おちんこと

こんじよう

かなら

たいなん

あ

はさておきぬ、今生こんじように必ず大難たいなんに値あうべし。いわゆる、

たこく

攻

かみいちにん

しもばんみん

いた

いちどう

他国たこくよりせめきたりて、上一人かみいちにんより下万民しもばんみんに至いたるまで、一同いちどう

の歎なげきあるべし。譬たとえば、千人せん にんの兄弟きょうだいが一人いち にんの親おやを殺ころした

らんらんに、この罪つみを千せんに分わけては受うくべからず。一いち々に皆みな、

無間大城むけん だいじょうに墮おちて、同じおなく一劫いつこうを經ふべし。

この国くにも、またまたかくのごとし。娑婆世界しゃば せかいは、

五百塵点劫ごひやくじんてんこうより已来このかた、教主きょうしゅ釈尊しやくそんの御所領ごしよりょうなり。大地だいち・

虚空こくう・山海さんかい・草木そうもく、一分いちぶんも他仏たぶつの有うならず。また一切衆生いつさいしゆじよう

は釈尊しやくそんの御子みこなり。譬たとえば、成劫じょうこうの始はじめ、一人いちにちの梵王ぼんのう下くだつ

て六道ろくどうの衆生しゆじようをば生うんで候そうろうぞかし。梵王ぼんのうの一切衆生いつさいしゆじようの

親おやたるがごとく、釈迦仏しゃかぶつもまた一切衆生いつさいしゆじようの親おやなり。また、

くに いっさいしゅじよう

きようしゅしやくそん みようし

この国の一切衆生のためには、教主釈尊は明師にておわ

ふるぼ しし おん こくびやく わきま

するぞかし。父母を知るも師の恩なり。黒白を弁うも

しやくそん おん

釈尊の恩なり。

てんま みい そうろうぜんどう ほうねん もう

しかるを、天魔の身に入つて候善導・法然などが申す

つ ことくど あみだどう つく いちぐん いちごう いっそん

に付いて、国土に阿弥陀堂を造り、あるいは一郡・一郷・一村

とう あみだどう つく ひやくせいばんみん いえ

等に阿弥陀堂を造り、あるいは百姓万民の宅ごとに

あみだどう つく いえいえひとびと あみだぶつ か

阿弥陀堂を造り、あるいは宅々人々ごとに阿弥陀仏を書き

つく ひと くちぐち こうしよう とな

造り、あるいは人ごとに、口々に、あるいは高声に唱え、

いちまんべん ろくまんべん とな すこ

あるいは一万遍、あるいは六万遍など唱うるに、少しも

智慧ある者はいよいよこれをすすむ。譬えば、火にかれた

る草をくわえ、水に風を合わせたるに似たり。

この国の人々は、一人もなく教主釈尊の御弟子・御民ぞ

かし。しかるに、阿弥陀等の他仏を一仏もつくらずかかず

念仏も申さずある者は、悪人なれども、釈迦仏を捨て奉る

色はいまだ顕れず。一向に阿弥陀仏を念ずる人々は、既に

釈迦仏を捨て奉る色顕然なり。彼の人々のはかなき念仏

を申す者は悪人にてあるぞかし。父母にもあらず主君・師匠

にてもおわせぬ仏をば、いとおしき妻のようにもてなし、

げん こくしゅ ふぼ みようし しゃかぶつ す めのと
現に国主・父母・明師たる釈迦仏を捨てて、乳母のごとく

ほけきよう うち じゆ たてまつ ふごう もの
なる法華経をば口にも誦し奉らず。これあに不孝の者に

ふごう ひとびと いちにん ににん ひやくにん せんにん
あらずや。この不孝の人々、一人・二人・百人・千人なら

いっこく にこく かみいちにん しもばんみん にほん
ず、一国・二国ならず、上一人より下万民にいたるまで、日本

こくみな 挙 いちにん さんぎやくざい 者
国皆こぞつて一人もなく三逆罪のものなり。

にちがついろ へん 睨 だいち 怒
されば、日月色を変じてこれをにらみ、大地もいかりて

躍 上 だい 彗 星 てん 滔 たいかくに じゆうまん
おどりあがり、大せいせい天にはびこり、大火国に充満す

ひがごと 思 われ ねんぶつ 暇
れども、僻事ありともおもわず、「我らは念仏にひまなし。

うえ ねんぶつどう つく あみだぶつ たも たてまつ じさん
その上、念仏堂を造り、阿弥陀仏を持ち奉る」なんと自讃

するなり。これは賢かしこきようにてはかなし。譬たとえば、若わかき夫妻ふうふ

等とうが、夫おとこは女めを愛あいし、女めは夫おとこをいとおしむほどに、父母ふぼの

行ゆ方くえ知をし 夫ふは女ぼを愛をし、女わは夫ををいとおしむほどに、父母われの

ゆくえをしらず。父母ふぼは衣ころも薄うすけれども、我われはねや熱あつし。父母ふぼ

は食じせざれども、我われは腹はらに飽あきぬ。これは第一だいいちの不ふ孝こうなれ

ども、彼かれらは失とがともしらず。いわんや、母ははに背そむく妻め、父ちちにさか

える夫おとこ、逆ぎやく重じゆう罪ざいにあらずや。阿あ弥み陀だ仏ぶつは十じゆう万まん億おくのあな

たに有あつて、この娑しゃ婆ば世せ界かいには一いち分ぶんも縁えんなし。なにと云いう

とも故ゆえもなきなり。馬うまに牛うしを合あわせ、犬いぬに猿さるをかたらい

るがごとし。

にちれんいちにん

ただ日蓮一人ばかり、このことを知りぬ。命を惜しんで

いのち お

い こくおん ほう うえ きようしゆしやくそん おんかたき

云わずば、国恩を報ぜぬ上、教主釈尊の御敵となるべし。

おそ

もう

しぎい

これを恐れずしてありのままに申すならば、死罪となるべ

しぎい

免

るぎい

うたが

し。たとい死罪はまぬかるとも流罪は疑いなかるべしとは

か し

ぶつおんおも

ゆえ

ひと

憚

兼ねて知つてありしかども、仏恩重きが故に、人をはばから

もう

ず申しぬ。

あん 違

りようど

なが

そうら

なか

ぶんえいくねん

案にたがわず、両度まで流されて候いし中に、文永九年

なつ ころ さどのくにいしだのこういちのさわ

ところ

あ

あず

の夏の比、佐渡国石田郷一谷といいし処に有りしに、預か

みようしゆとう

おおやけ

わたくし

ふぼ

かたき

りたる名主等は、公といい私といい、父母の敵より

しゆくせ かたき

にく

やど にゆうどう

妻

も宿世の敵よりも悪げにありしに、宿の入道といい、めと

使

はじ

怖

恐

せんぜ

いい、つかうものといい、始めはおじおそれしかども、先世

ないないふびん

おも

こころつ

あず

のことにやありけん、内々不便と思う心付きぬ。預かりよ

じき

すく

つ

でし

おお

りあずかる食は少なし、付ける弟子は多くありしに、わず

はん

にくちみくち

折敷

わ

かの飯の二口三口ありしを、あるいはおしきに分け、ある

て い

じき

いえ

あるじ

ないないこころ

そと

いは手に入れて食いしに、宅の主、内々心あつて、外に

恐

うち

ふびん

はおそるるようなれども内には不便げにありしこと、いず

よ

忘

われ

う

ふぼ

とうじ

れの世にかわすれん。我を生んでおわせし父母よりも、当時

だいじ

おも

われ

う

おん

励

は大事とこそ思いしか。いかなる恩をもはげむべし。まし

やくそく

違

て約束せしことたがうべしや。

にゆうどう

こころ

ごせ

ふか

おも

もの

しかれども、入道の心は後世を深く思つてある者なれ

ひさ

ねんぶつ

もう

積

うえ

あみだぶつ

つく

ば、久しく念仏を申しつもりぬ。その上、阿弥陀堂を造り、

でんぱた

ほとけ

もの

じとう

恐

おも

田畠もその仏の物なり。地頭もまたおそろしなれど思つて、

ただ

ほけきよう

かみ

だいいち

どうり

直ちに法華経にはならず。これは、彼の身には第一の道理ぞ

むけんたいじよう うたが

かし。しかれども、また、無間大城は疑いなし。たとい

ほけきよう

つか

せけん

恐

これより法華経を遣わしたりとも、「世間もおそろしければ、

ねんぶつ 捨

おも

ひ

みず

あ

念仏すつべからず」なんど思わば、火に水を合わせたるが

ほうぼう

たいすい

ほけきよう

しん

しょうか

消

うたが

ごとし。謗法の大水、法華経を信ずる小火をけさんこと疑

いなかるべし。入道、地獄に墮つるならば、還つて日蓮がかえ にちれん

失とがになるべし。いかんがせん、いかんがせんと思わすらいおも 煩

て、今まで法華經を渡し奉らず。

渡し進わたらせんがためにもうけまいらせてありつる法華經ほけきよう

をば、鎌倉の焼亡に取り失い参らせて候由申す。かたかまくら しょうぼう と うしな まい そうろうよしもう

がた入道の法華經の縁はなかりけり。約束申しける我がにゆうどう ほけきよう えん やくそくもう わ

心も不思議なり。また我とはすすまざりしを、鎌倉の尼のこころ ふしぎ われ 進 かまくら あま

還りの用途に歎きし故に口入有りしことなげかし。本錢にかえ ようと なげ ゆえ くにゆうあ 歎 ほんせん

利分を添えて返さんとすれば、また弟子が云わく「御約束違りぶん そ かえ でし い おんやくそくたが

もう

しんたいきわ

そら

ひと

おも

い」なんど申す。かたがた進退極まつて候えども、人の思

よう

おうわく

ちからおよ

ほけきよう

いちぶ

わん様は狂惑のようなるべし。力及ばずして法華経を一部

じっかんわた

たてまつ

にゆうどう

祖母

もの

ないないこころ

十巻渡し奉る。入道よりも、うばにてありし者は内々心

寄

たも

たま

よせなりしかば、これを持ち給え。

にちれん

もう

おろ

もの

もう

もち

日蓮が申すことは愚かなる者の申すことなれば用いず。

い

ぶんえいじゆういちねんたいさいきのえいぬじゆうがつ

もうこころ

されども、去ぬる文永十一年太歳甲戌十月に蒙古国より

つくし

寄

つしま

もの

固

筑紫によせてありしに、対馬の者かためてありしに

そこのそこのまのじように

ひやくししようとう

おとこ

ころ

宗総馬尉逃げければ、百姓等は男をばあるいは殺し、

い

おんな

と

あつ

て

あるいは生け取りにし、女をばあるいは取り集めて手を

通ふね 船ゆ 結つ 付け、あるいは生い け取りど にす。一人いちにん も助たす か

ものい 寄き せき 者なし。壱岐い によき せても、またかくのごとし。船ふね おしよ押 せ

る者なし。壱岐い によき せても、またかくのごとし。船ふね おしよ寄 せ

ぶぎ 豊前ぶぜん 司し 是ぜ 逃に げて

てありけるには、奉行入道ぶぎよう 豊前ぶぜん 司し は逃に げて落お ちぬ。

まつらとう すうひやくにん う

松浦党は数百人打たれ、あるいは生い け取りど にせられしかば、

よう 浦うら 々ら の百ひやく 姓しやう ども、壱岐い ・対馬つしま のごとし。ま

寄せたりける浦々の百姓ども、壱岐・対馬のごとし。ま

こんど か 彼か の国くに の百ひやく 千せん 万まん 億おく の兵つわもの 、

た今度はいかんがあるらん。彼の国の百千万億の兵、

にほんこく ひ 一いっ 名めい 寄よ せてあるならば、いかに成な るべき

日本国を引き回らして寄せてあるならば、いかに成るべき

きた て 北きた の手て は、

まず佐渡の島に付いて、地頭・守護をば須臾

う こ 北きた の手て は、

まず佐渡の島に付いて、地頭・守護をば須臾に打ち殺し、百姓等は北山へにげんほどに、あるいは殺さ

れ、あるいは生け取られ、あるいは山にして死ぬべし。そ

もそもこれ程のことは、いかんとして起こるべきぞと推す

べし。前に申しつるがごとく、この国の者は一人もなく

三逆罪の者なり。これは梵王・帝釈・日月・四天の、彼の

蒙古国の大王の身に入らせ給いて責め給うなり。

日蓮は愚かなれども、釈迦仏の御使い、法華経の行者な

りとなのり候を、用いざらんだにも不思議なるべし。そ

の失によって国破れなんとす。いわんや、あるいは国々を追

い、あるいは引きはり、あるいは打擲し、あるいは流罪し、

でし ころ

しよりよう

と

げん

ふぼ

つか

あるいは弟子を殺し、あるいは所領を取る。現の父母の使

ひとびと良

にちれん

にほんこく

ひとびと

いをかくせん人々よかるべしや。日蓮は日本国の人々の

ふぼ

しゆくん

みようし

そむ

父母ぞかし、主君ぞかし、明師ぞかし。これを背かんこと

ねんぶつ

もう

ひとびと

むけんじごく

お

けつじよう

よ。念仏を申さん人々は、無間地獄に堕ちんこと決定なる

べし。たのもし、たのもし。

もうここく

せ

とき

たも

そもそも蒙古国より責めん時は、いかんがせさせ給うべ

ほけきよう

戴

くび

懸

たま

きたやま

のぼ

き。この法華経をいただき、頸にかけさせ給いて、北山へ登

たも

としころねんぶつしや

やしな

ねんぶつ

もう

しやかぶつ

らせ給うとも、年比念仏者を養い、念仏を申して、釈迦仏・

ほけきよう

おんかたき

たま

ひさ

法華経の御敵とならせ給いてありしことは久しし。また、

いのち

ほけきよう

うら

たも

もし命ともなるならば、法華経ばし恨みさせ給うなよ。ま

えんまおうぐう

なん

おお

痴

た閻魔王宮にしては何とか仰せあるべき。おこがましきこ

思

とき

にちれん

だんな

おお

ととはおぼすとも、その時は「日蓮が檀那なり」とこそ仰せ

あらんずらめ。

ほけきよう

がくじようぼう

つね

ひら

またこれはさておきぬ。この法華経をば学乗房に常に開

たも

ひと

い

ねんぶつしゃ

しんごんし

じさい

かさせ給うべし。人いかに云うとも、念仏者・真言師・持斎

ひら

たも

にちれん

でし

なんどにばし開かさせ給うべからず。また日蓮が弟子と

名乗

にちれん

はん

たも

もの

おんもち

なのるとも、日蓮が判を持たざらん者をば御用いあるべか

きようきようきんげん

らず。恐々謹言。

ごがつようか

五月八日

いちのさわのにゆうどうのにようぼう

一谷入道女房

にちれん

日蓮

かおう

花押